

ならば。初めの下塗りを此考へて綿密に且つ充分注意して書き最後の運筆に縦横の敏腕を振ふやうにすれば面白い畫が出来ること請合であらう。(バーヂ、ハリソン稿)

ターナーの水彩畫 [五]

鶴澤四丁・譯

ターナーが成年に及んでから一八〇七年以後としてある一氏の創作力は堪えず増進して居る。これが水彩畫に於てよりも油繪に於てより多く明亮である。この故は氏は水彩畫を以て挿畫を多く作製して居るからである。併し挿畫に於ても氏の創作的想像的の力を見られぬではない、例令ば *Zeus and Hesperie*, *Peat Bog*, *Procris and Cephalus*, *The Lost Sailor* 其他がそれである。然るを近世の傳記作家はターナーが効績の見るべきものはあるが、創作的の畫家でない、單に畫解的畫家であるといふて居る。この説が根蒂を深くして居る、最近の獨逸の近世美術の批評家がこの流を酌んで同説を繰返して居る。併しながらこの説は謬見の甚しきものである。The *Frosty Morning*, and *Crossing the Brook*, *Childe Harold's Pilgrimage* and *Ulysses Drifting Polypheumus*, The *Shipreck* 及其他の作畫家が創作的畫家でないからうか。これをしも創作的でないとするならば何れの處にか創作的風景畫家あらんやである。ボチセリ、ミカイル・アンヂエロ、ラファイイル、ルーベンス、レンブラン等を誰も創作的風景畫家でないといふものはあるまい。ターナーも亦これ等と比肩すべき風景畫家であるのである。

ターナーの水彩畫の技巧的熟練はこゝに言ふべき要はあるまい。氏の畫中の意匠、平均、音律等の感じ即ち畫風なるものが常に表現されて居つた。この畫風なるものは、ガスパー・ポーシン、クロード其他十七世紀の名畫家の流を酌んだリチャード・ウイソンに付ての切實なる研究から得來つたのである。氏の繪畫には試作といふものがない。意匠は最初から完全なものであつた。氏の作品が屢己の氣に入らぬものゝあると

きはこれを棄て、顧みなかつた。氏は優秀の大色彩家であつた。氏の後半生は大いに色彩に思を凝らしたのであつた。氏は普通の寫眞に依つて繪畫を作ることが出来なかつたのもその故であつた。中年の頃の氏の色彩は力あり、光彩はあつたが、晩年のスケッチに比しては純粹に美麗に高尙てなかつたのである。

ターナーの水彩畫殊に一八二〇年と一八三六年の間の製作品は意匠が徒に繁雜で畫題及光線等が複雑を極めて居る傾向のあるのは疑のない事實である。これは或程度までは此時代の英國美術の標準でもあり、また英國趣味ともいへるのである。此故に今日よりも猶この高調な作品製作を固守して居つたものがあつた、しかしターナーの作品には非常な高調なものではなかつたのである。ターナーの點景人物がまた多くは不満足のものであつた。これは氏が描き得なかつたのではない、最初は精しく注意深い描き方をして居たことは氏が初期の作品に於て覗はれる。併しそれより後の作品に至ると他の美點を損せぬ限りに於て點景人物を單に光線や色彩もしくは組立の一點として受取つて居る。皆々成功しては居るが、或ものは無頓着に筆を下したものもあるのである。

ターナーは印象派の創始者たり偉人たる一人である。と現代風景畫派に屢推稱されて居る。或る點は無論さうであらう、しかし余を以て見ればこの印象派が現代のものと比較して性質に於て全然相違して居るのであつたと思はれるのである。

ターナーは生涯を通じて數千のスケッチを作つた、或は輕妙に或は精緻に自然界を描寫したもので、所謂「覺帖」であるが、これ等から推せば正しく印象派畫家ともいへるのである。然しながら皆これを土臺として更に氏の精確な、細微な遺漏なき自然界の研究と氏獨特の筆法とを附加すべきものであるのである。

然るに氏は癖として畫面の都合に依つて風景や建物の様を變更することが屢ある。——或は均齊シュムメトリの爲めに、或は抑揚の爲めに、或は色彩計畫の爲めにすることがある、——また畫面の意味を暗示せんが爲めにすることもあるのである。氏は風景の直寫主義には大反 対で、これを「繪 作製」といふと嫌ふて居つたことは

氏の書簡中に見えて居る、この書簡は今獨存して居るのである。風景の様を變へて描寫するときには必ず何か理由がある、かゝる場合には風景全體の印象は必ず保存することに苦心して居る。この見地からすれば、ターナーは印象派畫家であつたのである。

また氏の晩年に至つて純粹の日光の描寫を(重に油繪に於て)企てゝ居る、晩年のヴェニスの繪がそれある。また迅速な運動の描寫をも企てゝ居る、雨、速力、及蒸汽等がそれである。また自然界の偉大なる爭鬭力の描寫をも企てゝ居る、氏の Snow Storm off Harwich がそれである。氏はかゝる畫題は自己の頭腦を以て描寫したのである。かのホイットスラーの如き西歐美術に一新軸を出した夜景畫もこれと同一方法で共に印象派とせられて居る。

然しながら余を以て見れば、印象派の藝術と現今の批評家が絢爛の筆を振ふて世の稱賛を博せんことを喚起して居る近世風景畫派の藝術との間には實に雲泥の相違があると思はれる。佛國及英國の新進印象派畫家は自然を描寫するに當りて、形の漠然たるものを避け、確乎たる斷定を以て自然の通常の光景を表現するといふ自然描方の軌道を逸して居るの感がある、如何にかゝる機境があると説明せられても余の如きには唯無稽の幻視とより外には見えぬのである。又彼等は智能に訴ふる處の一種の文學であると排斥せられて居る。其描方は多少とも人の意表に出んことにのみ踰躋して居るが、多くは光線、陰影、及び色彩を點々の傳彩としてぼつ／＼に塗並べて、筆つきの粗い繪具の盛上つた、時としては參差凸凹の顏料を塗上げてある處は宛ら消火栓の噴水を見るの觀がある。確にターナーの印象派はこれ等の所謂印象派とは非常なる懸隔があるのである。故に今日の印象派風景畫の創始者であるとするには出來ないではないか。無論その効蹟はあらうけれども。

要するにターナーの藝術に於ける終局の位置が那邊にあるかを肯定せんとするのは尙早きに失するの嫌がある。ターナーは他の實際の大藝術家(廣義の)の如くに裁決せらるべきもので、氏の欠點や誤謬に依て

裁決せらるべきものではあるまいではないか——無論氏にはこの欠點や誤謬が多かつたが——氏の到達した描畫の極致により、また後進畫家の模範を残した點から裁決せらるべきものであると思はるゝのである。故に余一箇の意見としてはターナーの水彩畫が將來の時代に到つて猶褪色せずに保存せらるゝならば、油繪と共に總ての世紀と總ての畫派中の最高大家中に列すべき價値あるものとして氏に指を屈することを疑はないのである。(ダブルユー、ジー、ローリングソン稿)——完結——

額縁と繪畫〔下〕

大 下 藤 次 郎

△マツトといふのは臺紙のことで、普通は五厘若くは一分位ひの厚さの臺紙の中央を斜めに切抜き、裏から繪を貼つて奥深く見せるやうになつてゐる。

△マツトの色は金銀白を普通とし、各種の鼠、オリイヴ、焦茶、白茶、クリーム、淺黄、黒、雲形模様、ボカシ等種々ある。また平面のみでなく、粗密の布目、格子、縞などの型をつけたものもある。

△マツトの色は繪畫によつて定むべきものであつて、若し其色の調和を誤る時は、繪の感じがマルで變つて殆ど見られぬものになつてしまふし、若し適當の調和を得るならば、裸で置いた時よりも一段も二段も其繪を引立たせて見せるものであるから、此點は大に研究すべきものである。

△繪はさまざまであるがマツトは普通白若くは金なら殆どどの様な繪畫にも調和する。白つぽい繪で、白のマツトで明る過る時は金にする。黄や赤を多く含むで金との調和が重く見える時は白にする。此白と金は極めて無事によい結果を現はすもので、よしその繪を引立たない迄も決して其繪を醜くゝする恐れはない。△クリーム色、淡い鼠、焦茶なども繪によつては大に引立たせて見せることがあるが、なるべく間色は使用せぬ方が安全である、これ等の色臺紙を使用する場合でも、繪に接する斜めの切口は、なるべく幅を廣くし